

## 諏訪の森に大庭園があった 井村 啓造

先日、長崎歴史文化協会で長崎の諏訪の森の石組について越中哲也先生にお尋ねしたことが、この「ながさきの空」を書ききりかけとなりました。

私の父は文化や歴史に造詣が深かった。50年程前に、父と二人で立山千本桜を最初に植樹したのは諏訪公園の丸馬場の地でした。その地の忠魂碑の横手にある石組の前に立ち、父から「ここは寺の跡地だ、この付近から六角堂あたりまで昔は寺の庭園であろう」と言われたのが子どもの頃だった。

昨年から六角堂付近の石組の写真を撮ったり、スケッチしたりするうちに、次第に私は石の一つ一つに歴史を感じるようになった。

調べるうちにいつしか、ひよっとしたらここは、大きな日本庭園ではないだろうか、などと思いを深めながら検索し、県立図書館で文献を調べたが分からなく行き止まってしまった。そこで長崎歴史文化協会の



長崎諏訪森の石組

越中先生や市立博物館の原田館長に写真を検証してもらった。これは新しい発見かもしれない。これまで長崎の歴史の中で埋もれた部分ではないか。もう少しよく調べてみたら」と言われ、更に念入りに郷土史を調べて回った。

長崎市史によると、現在の諏訪公園丸馬場の地に正保二年（1645）、天台宗の僧・玄澄が小庵をむすんだとある。

この磐座、磐境に注目したのが日本庭園の石組に大きな影響を与えた重森三玲（しげもりみれい 1896～1975）である。彼の著書「日本庭園史大系」第一巻の論文の中で、自らの作庭の体験を踏まえて「私が石を組む時、一個の石を単なるものとして扱っているのではない。石の中に何かあるものを見ている。何かしら石の中に不明ながらも、あるものを感じ取る事が出来る」としている。日本庭園では慶兆の物として亀や鶴の型が表される。これは道教の影響を受けているとされ、江戸時代には徳川大権現の永遠を祈る鶴石、亀石は庭園造りには大いに用いられている。

私は様々な説と議論は別にして、現在私たちの目前に、大きな亀の形をした石、座禅を組んだと思われる座禅石、鶴に見立てた立石が見受けられる。その石組を取り囲むような人工的な石組が現存し、鯨を形どった鯨石等も見受けられ、これらを奉納して徳川幕府への忠誠心をこの庭園の形として表現したものではないだろうかと考えている。また付近には、庵をむすんだ跡地と見られるものも現存する。

これらのことから明らかに此の石組は庭園を意味するものであるが、人が眺めて風流を楽しんだ日本庭園とは異なり、家康を神格化させて祭るための庭園であり、このことにより外部に出ることも、歴史に書き留められることもなく、埋もれていたのではと私は推測している。

石組付近の庭園の広さは約600坪は下らない。この広い庭園が長崎公園の内に存在しており、樹齢約700年の公園内の大楠、藤の大木等が時代の歳月を重ねこれらの石組を守り、今日に至っているのである。

来春完成する長崎歴史文化博物館と、この諏訪の森を長崎歴史の一つのエリアと位置付ける事は十分に可能であると思われる。

この景観と環境は先人たちが残してくれた長崎の誇りだと考えている。次代に残すべき素晴らしい遺産である。私はこの諏訪の森の景観一帯を長崎市の天然記念物に指定するべく、努力して行きたいと考えている。

（長崎さくら会）

承應元年（1652）長崎奉行がその事を聞き寺を建立させた。その年玄澄は江戸・東叡寺の大僧正・公海から松嶽山正光院安禅寺の寺号と、絵師狩野家貞の筆による東照大権現家康像を与えられている。安禅寺としたのは慶長年間、当地に安禅寺という尼寺があったという伝説に基づいたとしている。寛文十二年（1672）、長崎奉行として牛込忠左衛門が任せられ、安禅寺の由来を聞き東照宮の神像を奉持して、安禅寺の上方に東照宮を建立するように命じた。

その後は寺の改修も進み、各方面からの多くの寄進も集まり、安禅寺と東照宮は長崎一の大寺院となり多くの信仰を集めていた。

安政以降、長崎港は外国貿易の減退により寺は衰退し、明治に入り廃仏毀釈により廃寺となり、3000坪を越した敷地の大半は現在の長崎公園となったのである。

其中で東照宮は、明治初年に破壊されたが明治三十四年（1901）、同地に再興され現在に至っている。県立図書館横から丸馬場を経て東照宮にかけての現存する石門、石垣、石灯笼、石の唐獅子は当時をほうふつさせる素晴らしいものがある。この石垣の石は近くの男風頭といわれる岩原郷立山から切り出されたと推測している。

さて六角堂付近の不思議な石組は何であるだろうか。諏訪神社の話によると磐座（いわくら）磐境（いわさか）であり、祭祀跡であろうとのことであった。

磐座、磐境は古代の人々が神が降臨すると信じていた巨岩や石に囲まれた神聖な場所と言う意味である。

この遺跡は日本庭園と結びつかないかと、文献でルーツを調べたが結論は容易でないとして、其のルーツのひとつに磐座、磐境があるとしていると言っている。

### 風信

先月末、久しぶりに訪ねて下さった友人が、開口一番「長崎って、活気がなくなつたね」と言う。そして私に「観光都市長崎ではなく、文化を語る街・長崎にしないよ」と言う。

四月に入ったら、何か急に忙しくなった。今月からは毎週一回、古文書研究会に出席せよと言うし、台湾、上海の研修会にも是非同行せよと言われる。また原田正美会長、高尾副会長よりは、八月に行くチベツト研修会の準備もしておいて下さいと言われる。

四月八日は、お釈迦様の花まつり、二十一日は弘法大師の日であり、十六日は長崎バラモン大会の日、更に五月一日は媽祖様の誕生日、これも忘れぬように崇福寺に出席せよとの事。

二月のランタンFの媽祖行列はショーであり、「本当の媽祖祭は五月一日ですよ」と崇福寺藩美官総代より、厳しく御電話を戴く、当日十時崇福寺集合。天の神に山羊、豚を供え、福建料理をいただく。（参加希望者は事務局上田まで連絡下さい。会費三、〇〇〇円）

先年来たずねられていた「トルコ・ライス」長崎発祥の説。ふとしたことより其のルーツを知ることが出来た。そのうち発表する事にしようと考えている。

FMナガサキ・ラジオで毎朝九時半より私が「おしゃべりしている長崎話」、そのルーツは前長崎県立図書館長の故永島正一先生が昭和十五年四月よりNBCラジオで始められた「長崎ものしり手帳」に始まっている。以来何年になりましたかね。私なりに毎朝苦心しているのです。

二十六聖人の結城了悟神父の近著「ロレンソ了斎」を戴く。了斎は平戸白石の人であった事。彼は盲人であったが、信長、秀吉にも面談し、晩年は長崎に、そして古賀の教会にもおられた。更に、其の面影が一六〇〇年当時の長崎の風景を描いた南蛮屏風に、ヴァリニャーノ神父と共に描かれていると報告されている。皆様

におすすりできる「長崎キリシタン史料の一冊」である。（一、六〇〇円）

